

















14.53 5つの記憶の物語



①白の精輝路 ②小さな丘と、大きな山 ③木漏れ日と影
④スタッカーと展望台 ⑤始まりと、終りの場所

かつて神戸ベルトコンベアの通っていた道と、5つの記憶の場所



1974年 航空写真



1979年 航空写真



1985年 航空写真



団地内にある公園にて (1993.12.08)



生まれ育った北落合団地 (1993.11.28)



ベランダから見える風景 (1992.04.17)



部屋の窓からは、団地と給水塔の交互に並ぶ風景が見える (1994.11.23)



上空より 町の隙間を抜けるようにベルトコンベアが走る



名谷環状線の上空を走る



名谷環状線 撤去後



道路の上を走る



団地の隙間を通り抜ける



海岸近くの住宅街の間を抜ける



海岸近くの住宅街 撤去後



防波堤より船積み施設を眺める



須磨海岸の船積み施設

神戸ベルトコンベア

神戸のベルトコンベア(土砂運搬施設)は、かつて神戸の山と海を総延長約14.53kmで結んだ、世界最大規模の施設でした。

昭和39年の運転開始以来、41年もの間「山、海へ行く」と謳われた神戸のまちづくりを支えてきましたが、平成17年9月にその役目を終えました。

稼働していたときには、町の道路を越え、線路を越え、山から海へと土砂を運び、見た者の印象に残る構造物でした。取り壊された後も、町の中には数々のその痕跡を読み取ることができ、今はほんの少しの残骸がただ放置されている状態です。

その中でも、地表面に形として跡を残し、また私自身がかつてその近くに住んでおり、記憶としてはっきりと残っているC系以降の領域についてを敷地としました。



コンベアの領域区分と断面の高低関係

株式会社神戸市と私

私は、これからの私のために、決して変容することのない、“記憶”について考えたいと思いました。

私は、かつて『株式会社神戸市』とも呼ばれた、神戸のニュータウンで生まれ、2度の引っ越しを経験しました。団地での暮らし、震災での被害、様々な体験を経て今、私にとっての建築を設計するという行為は、自分の中にある空間の既知体験に基づいたものなのではないかと、常々感じていました。

—自分にとっての既知体験の集合体を作り上げる。

私にとって、幼少期の記憶の中で特に印象に残っていたのは、生まれ育った神戸のニュータウンを作り上げた、全長14.53kmにも及ぶ、巨大なベルトコンベアでした。

それらの痕跡を敷地選定の拠所としながら、その場所の記憶、私の記憶、あるいは、町の記憶として、5つのフォーリーの設計を行います。

白の排煙塔

名谷地区 C2 8.98



①敷地 ②コンベアの軌跡 ③クリーンセンターと白の排煙塔
④名谷駅前広場 ⑤総合運動公園



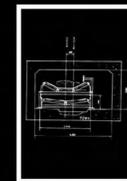
トンネルによる空間の境界



クリーンセンター内にある白の排煙塔



団地内給水塔



コンベヤトンネルが線路と道路を跨いで通る

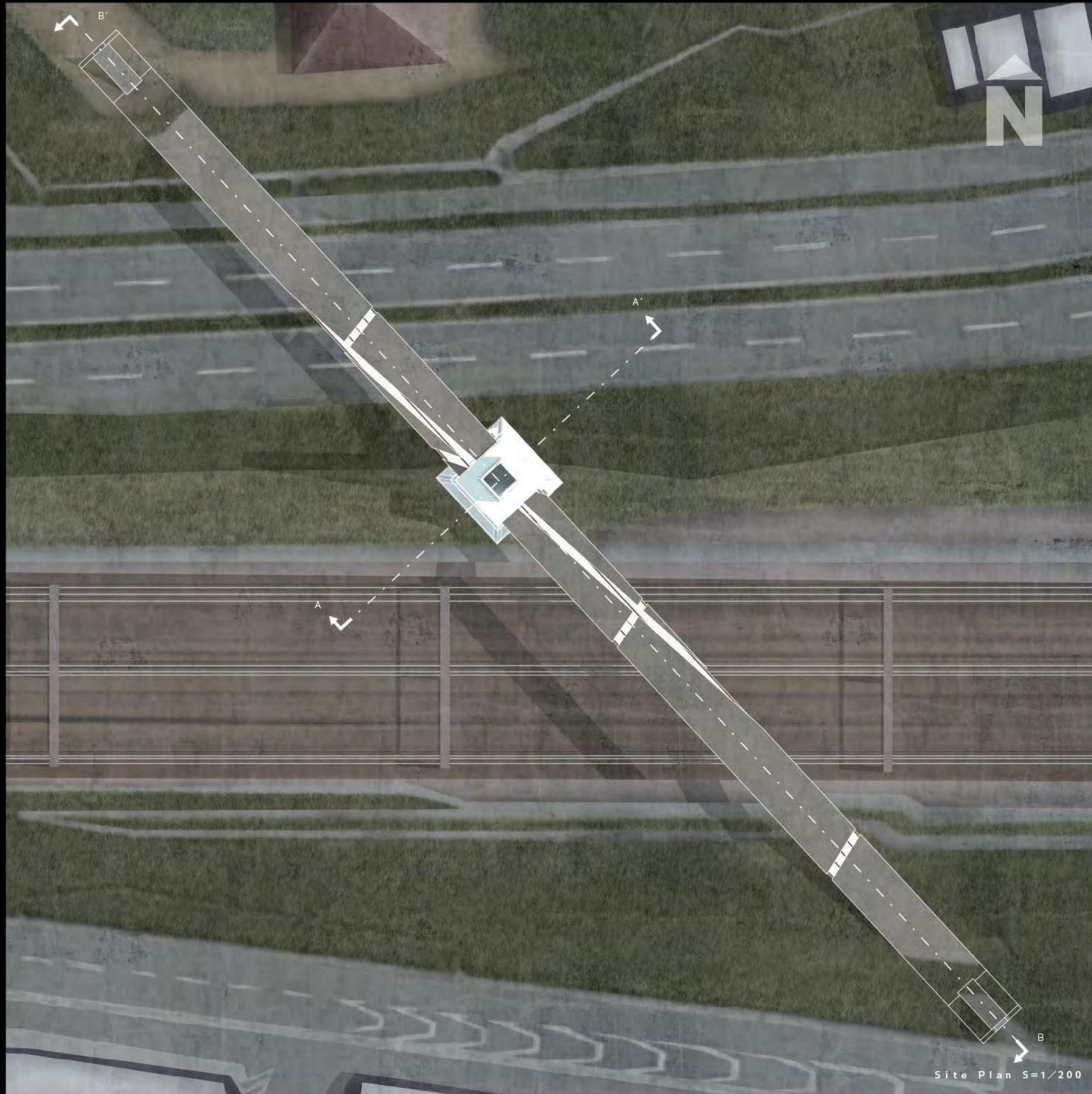


2006年の撤去後

生まれ初めて見た風景は、団地のベランダから見えるもの。
団地内の給水塔や、クリーンセンターの排煙塔が立ち並ぶ、何だかよくわからないけれども、
どこか惹かれた風景。

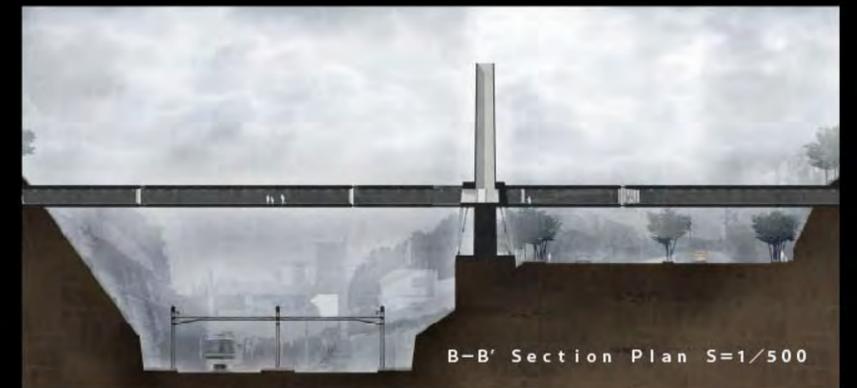
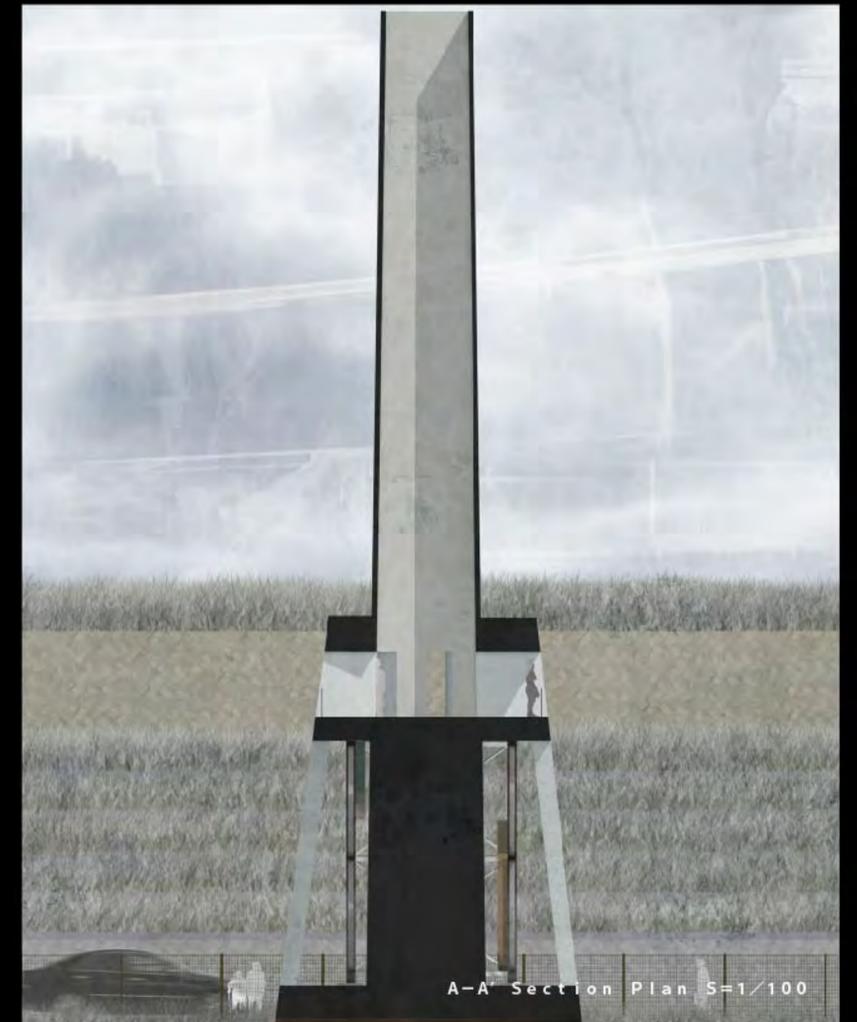
線路の上をまたいで走るコンベヤトンネル、
あるいは白の排煙塔の記憶と、塔から伸びる軸線を空間へと落とし込んでいきます。

白の排煙塔

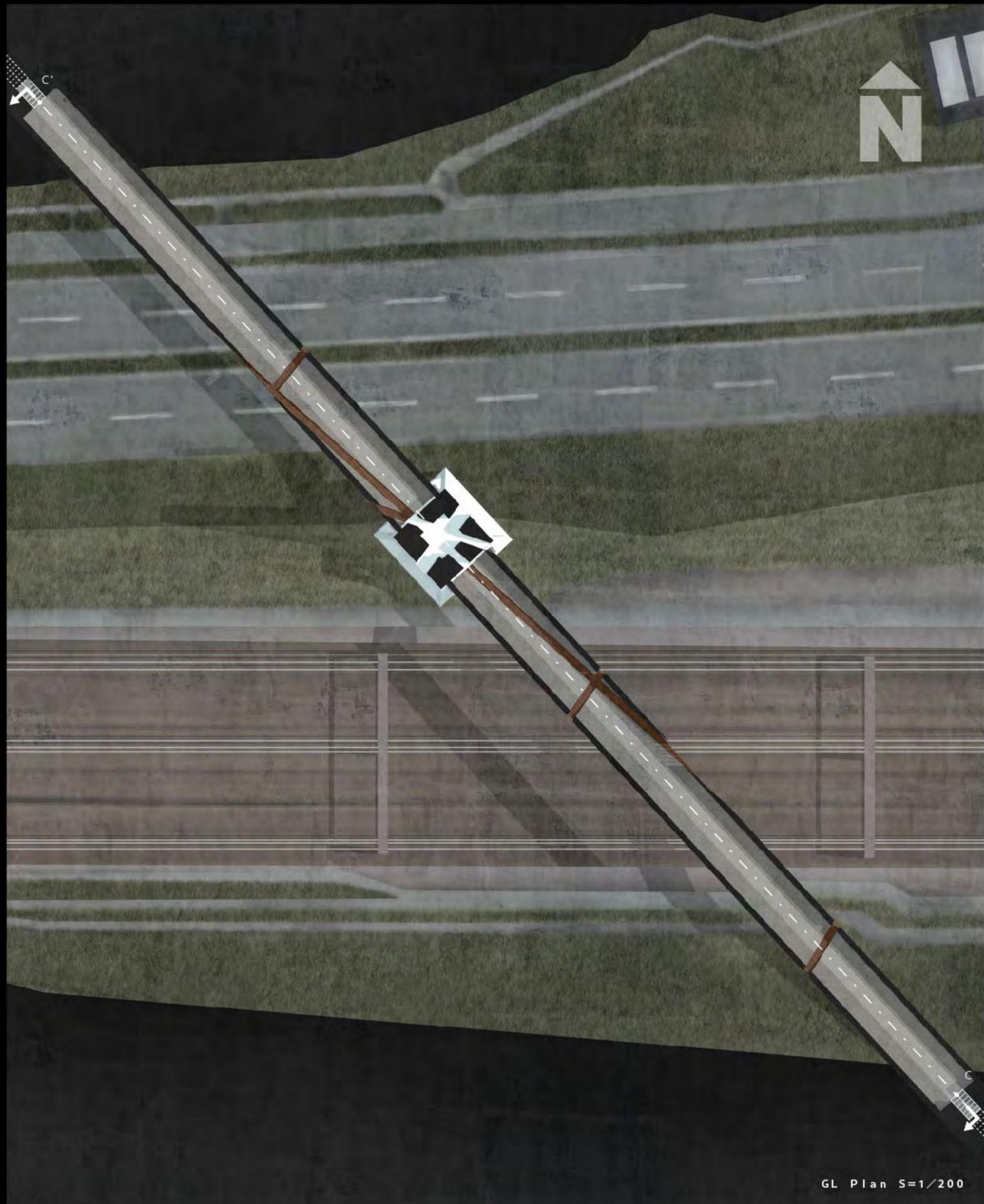


0m 2m 5m 10m 20m (S=1/100)

0m 5m 10m 20m (S=1/200)

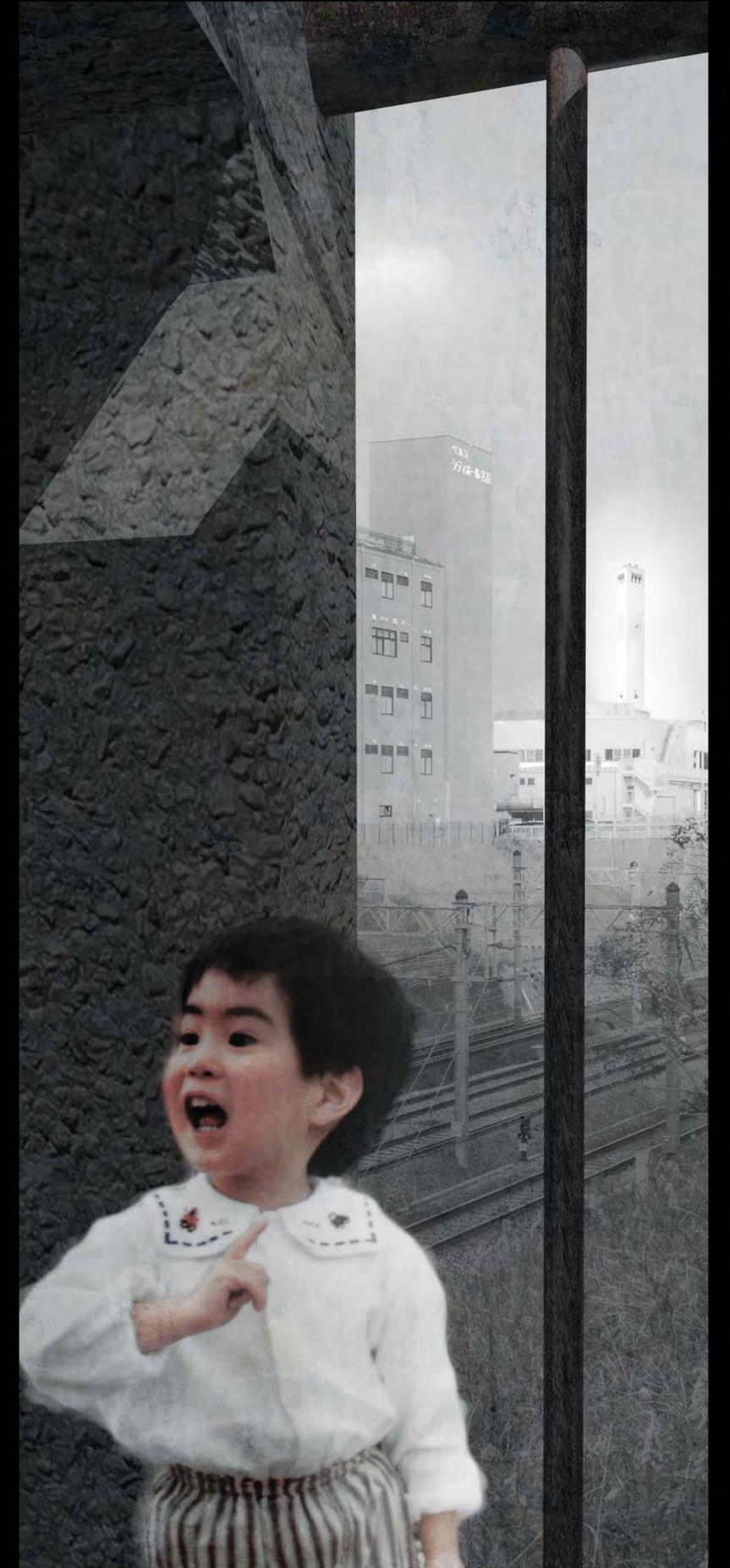


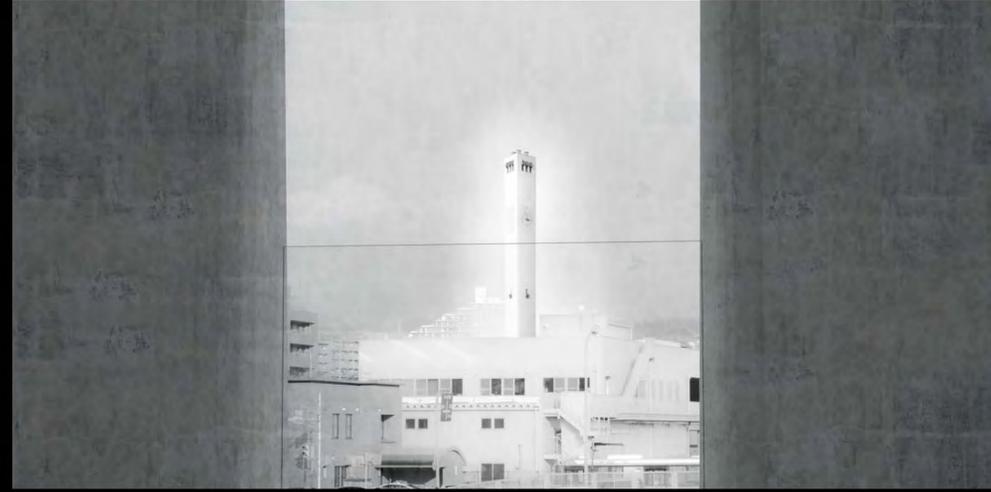
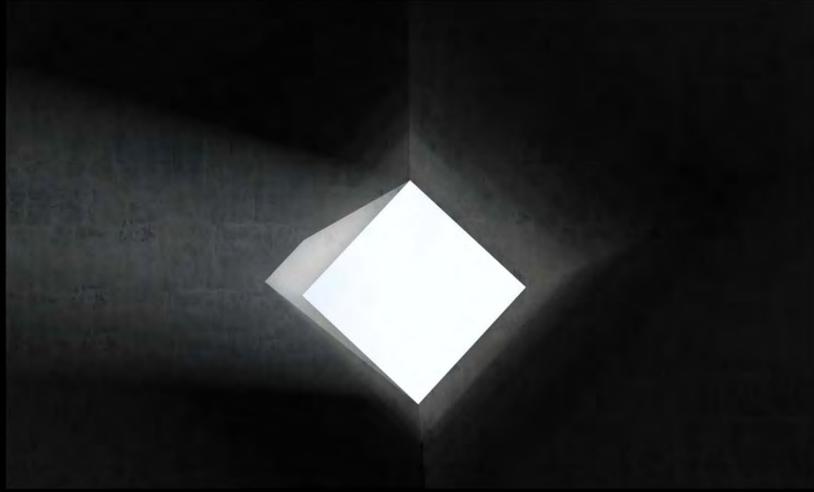
白の排煙塔



0m 2m 5m 10m 20m (S=1/100)

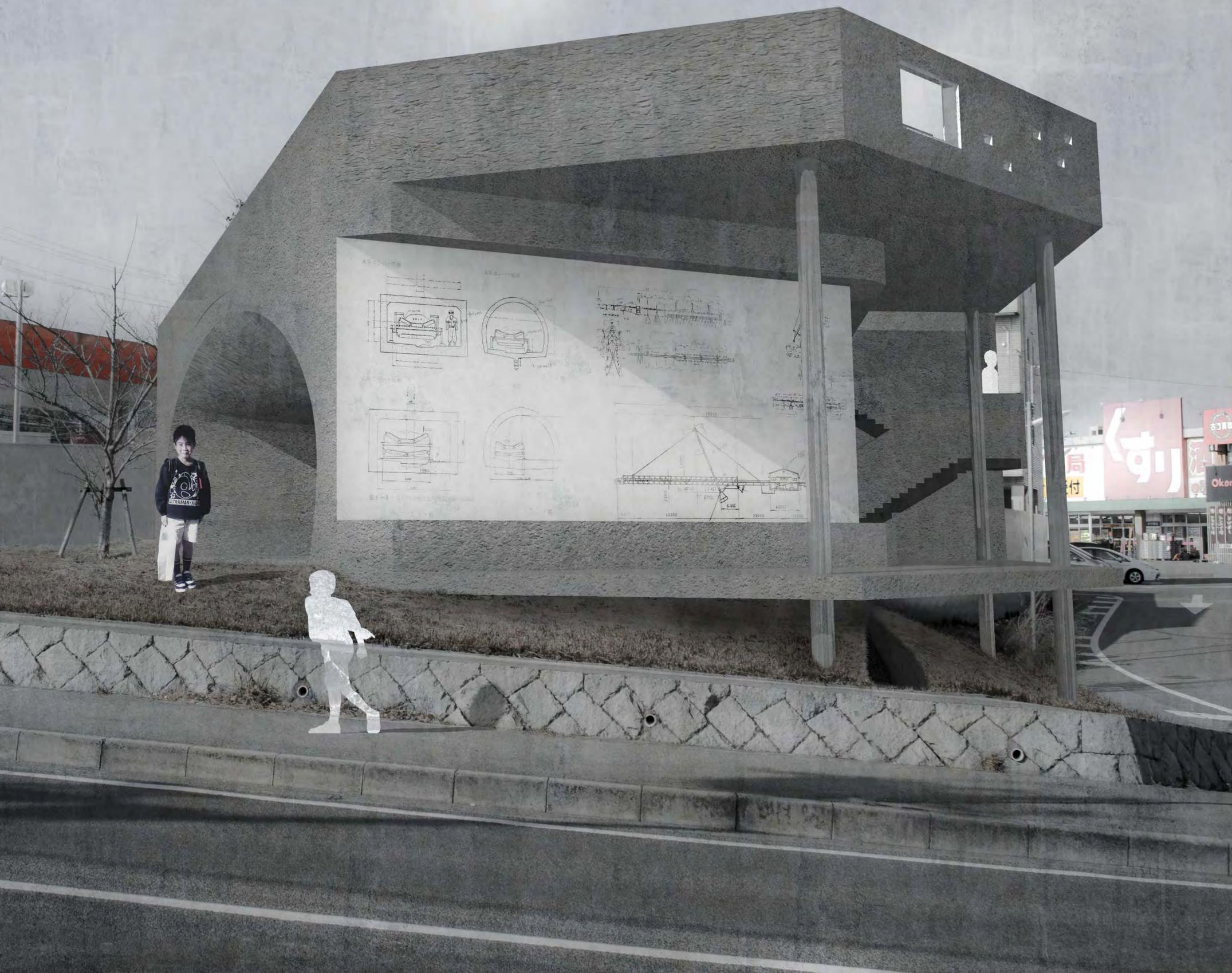
0m 5m 10m 20m (S=1/200)





小さな丘と、大きな山

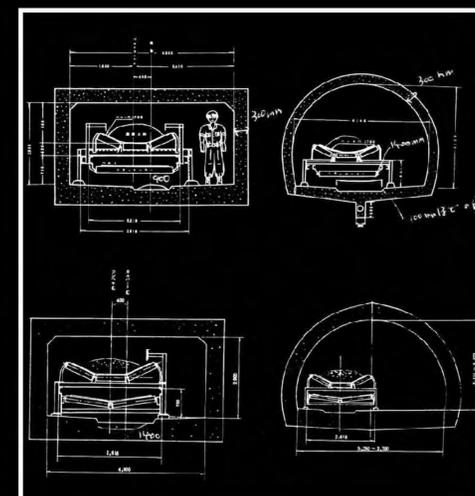
横尾地区 C1-A2 10.88



①敷地 ②コンベアの軌跡 ③町の中に存在する軌線
④南側空き地との関係性 ⑤登山道から敷地まで突き抜ける一本の道



コンベアトンネルによる
4つの断面スケール



9歳のときに引っ越して以来、10年以上住み続けた横尾地区。
四方を山に囲まれ斜面地の多く残るこの町には、
独特の空間スケールと遊び場で溢れていました。

機械室が置かれ、4つのコンベアトンネルの境界となっていたこの場所に、
トンネルのそれぞれのスケールを連続的に用いて、丘、あるいは山のような内部空間を造り、
敷地周辺の要素を取り込みながら空間を考えていきます。

小さな丘と、大きな山

Element



物心ついたときから見てきた山の風景。傍にあるようで、遠くにあるような、あるいはそれは、身体を包みこむような、起伏のある内外空間。



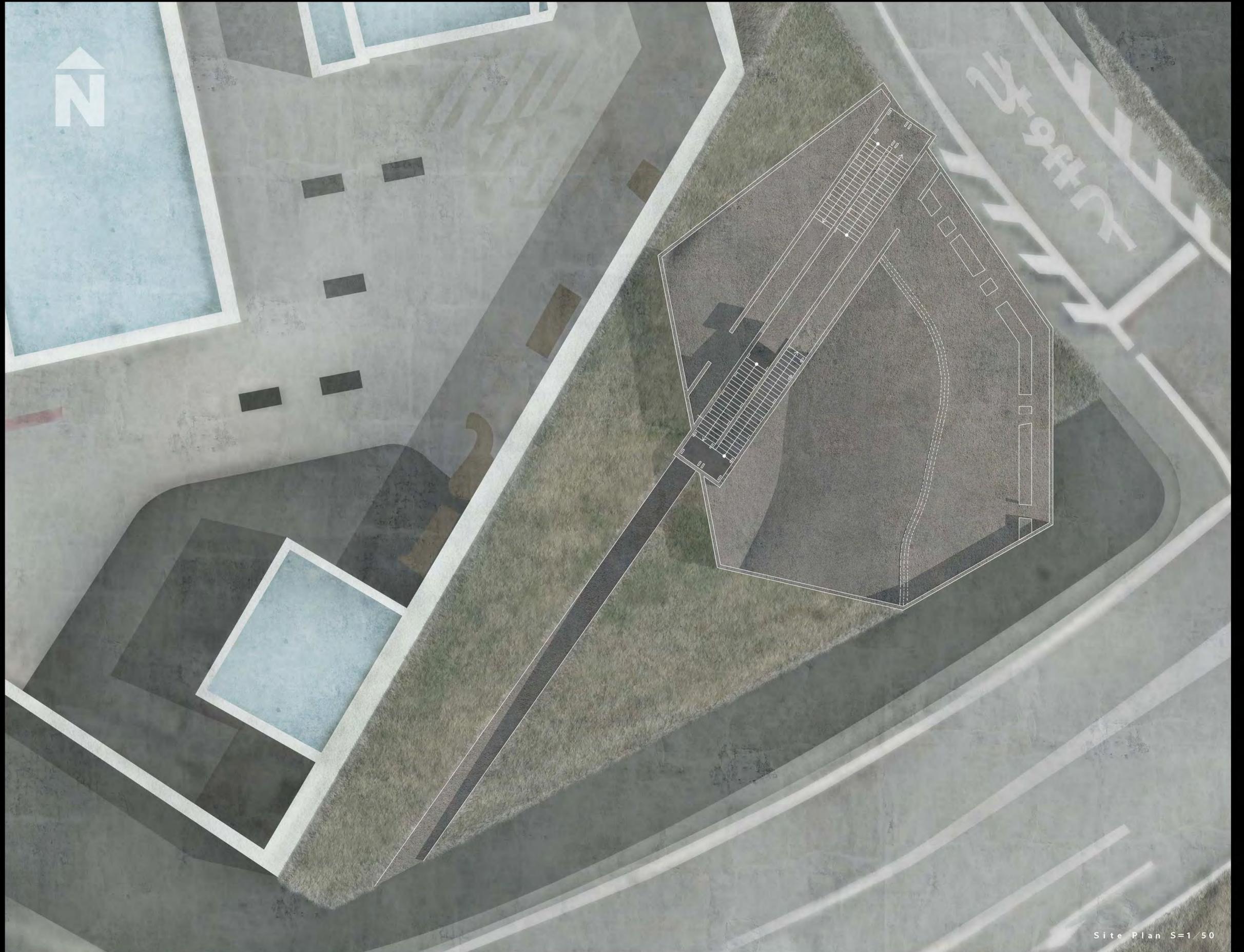
町の外周を走る、半分山に覆われたような遊歩道。細く消えてしまいたいような道と、背後に聳える山。細く消えていく道。



小さな丘から町の輪郭に沿って眺めると、株式会社神戸市の開拓の痕跡を垣間見ることができます。眺望を切り取る小さなフレーム。



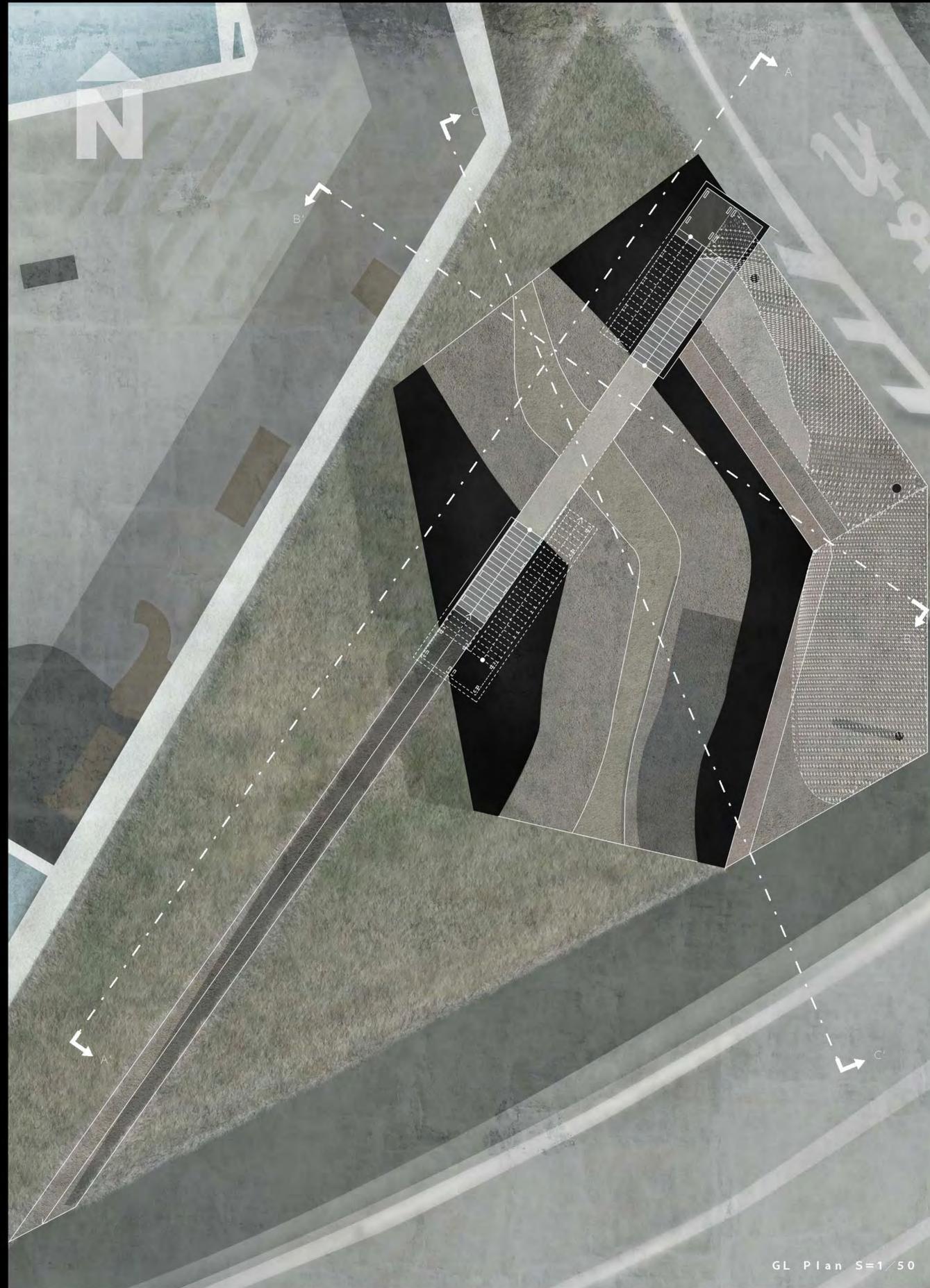
思い返すと、よく団地のバルコニーの軒下で遊んでいた記憶が浮かびました。子供にとって窮屈で居心地のよい遊び場。



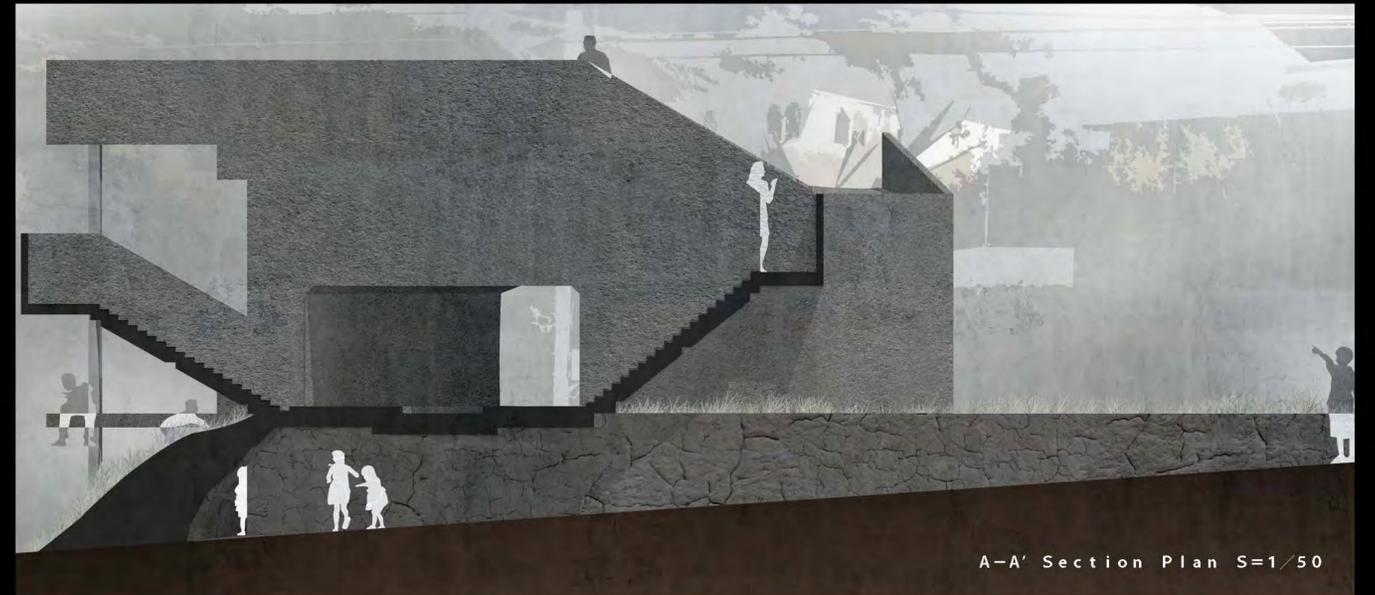
Site Plan S=1/50

0m 1m 2m 5m

10m 20m



GL Plan S=1/50



A-A' Section Plan S=1/50



B-B' Section Plan S=1/50



C-C' Section Plan S=1/50

小さな丘と、大きな山



West Elevation Plan S=1/50



North Elevation Plan S=1/50



South Elevation Plan S=1/50



East Elevation Plan S=1/50



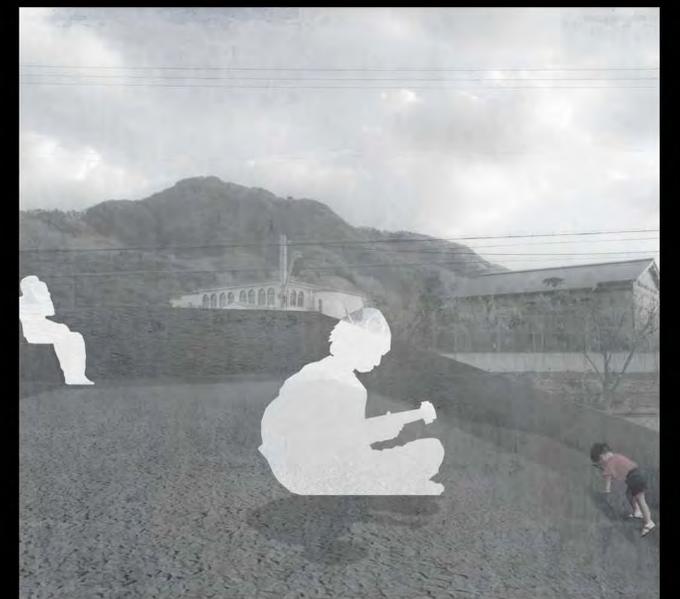
0m 1m 2m 5m

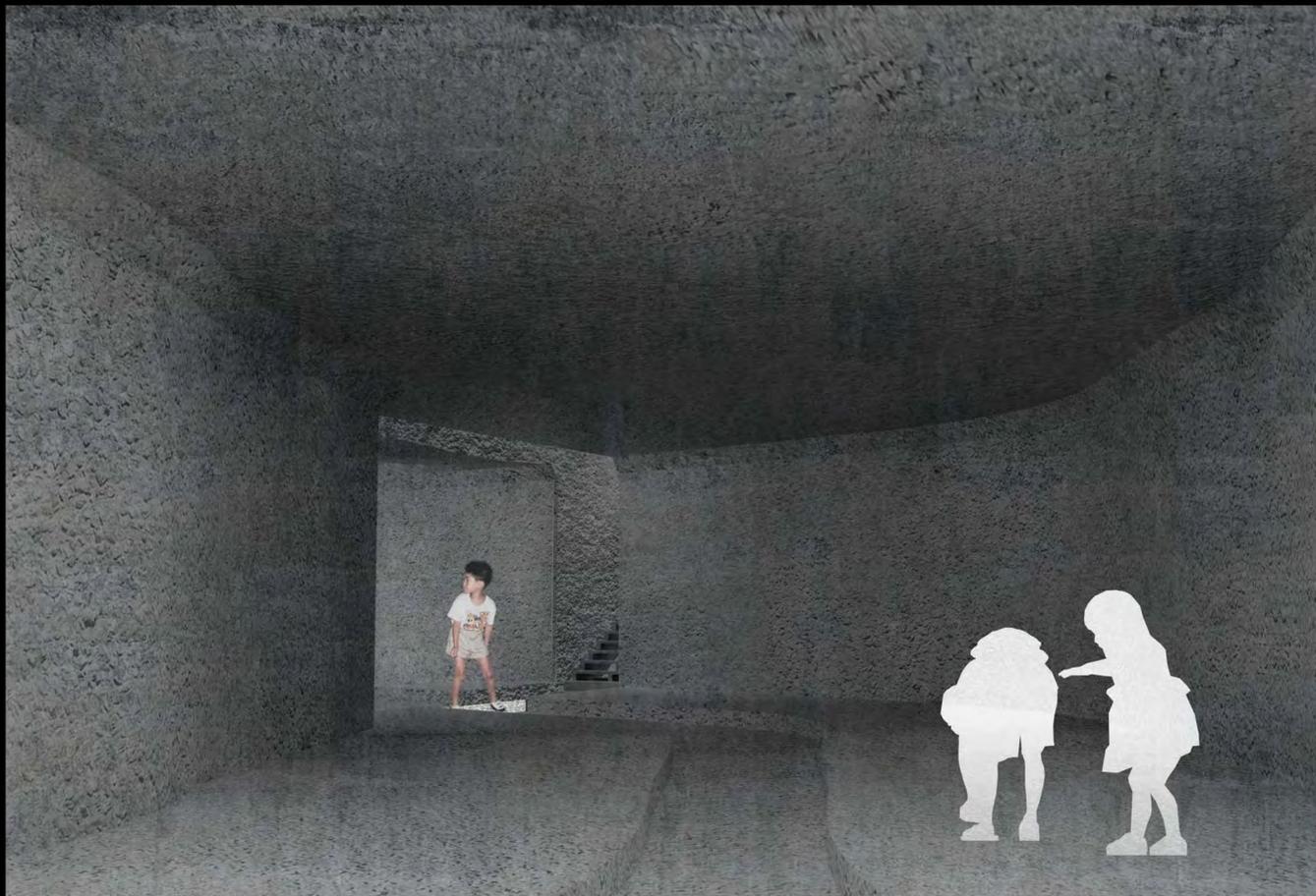
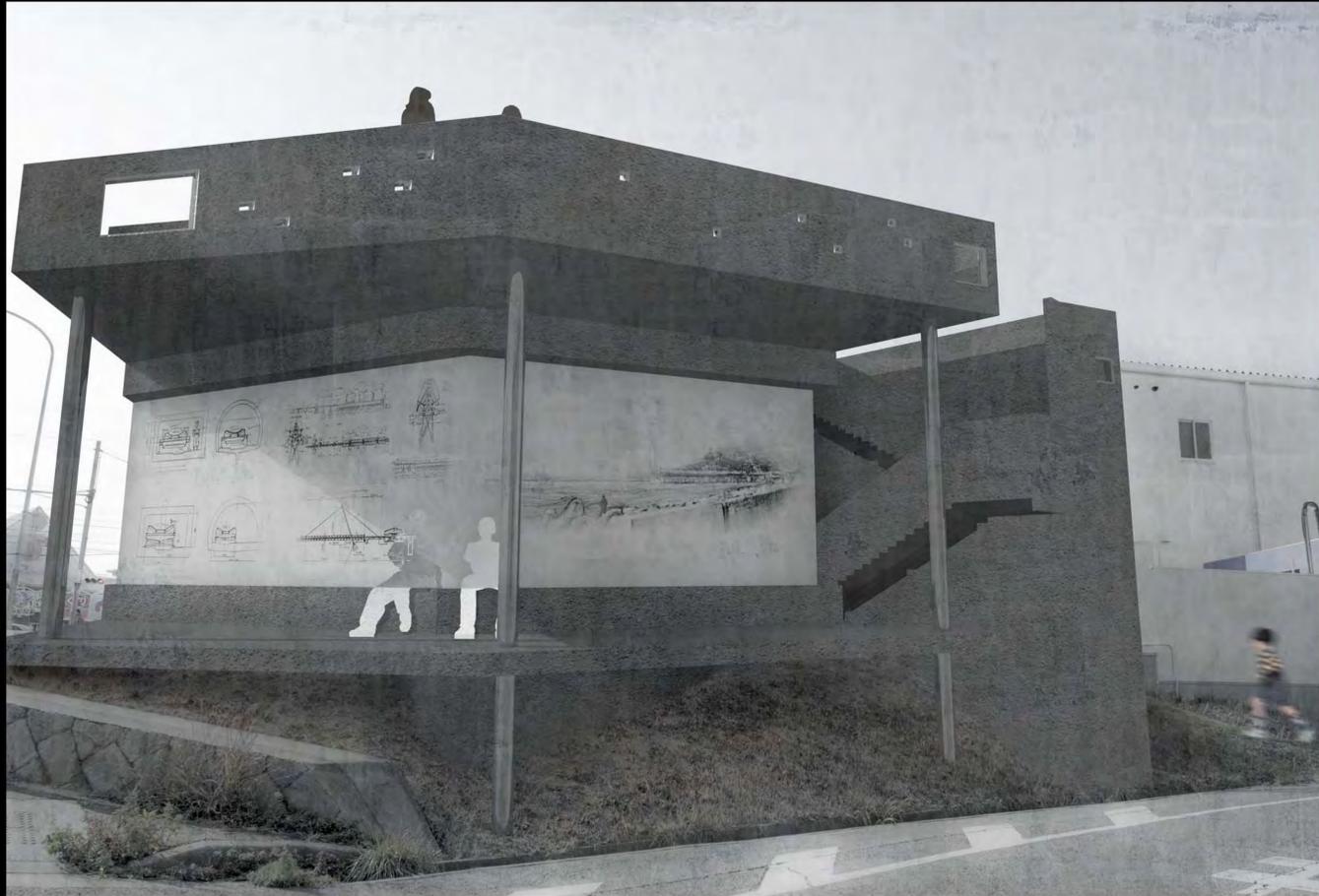


10m



20m



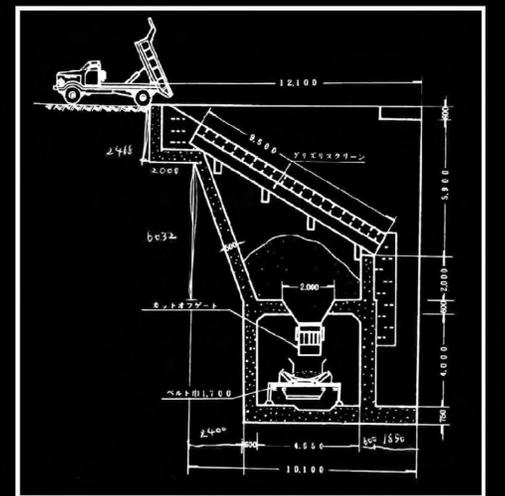


木漏れ日と影

高倉地区 A2-A1 11.69



①敷地 ②コンベアの軌跡 ③幹線道路からの抜け
④、⑤山に対する領域



ゴミ捨て場にある段ボールの塊を持ってきて、
原っぱをすべり台にして、秘密基地を作りました。

残された施設の残骸を手掛かりに、断面を空間へと落とし込み、
丘をオリジナルの形へとかけ戻します。

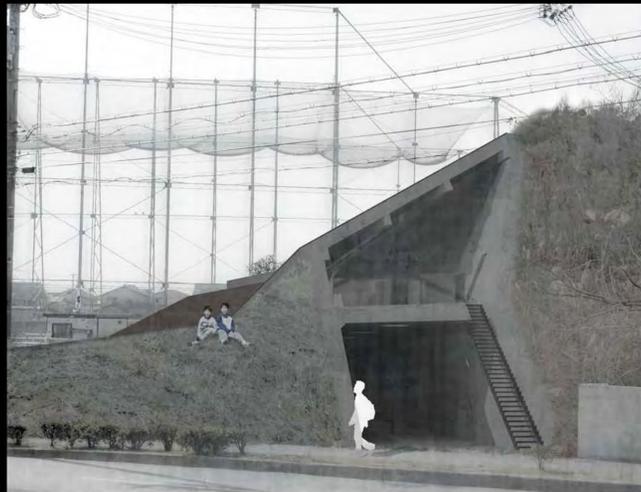
木漏れ日と影

Element



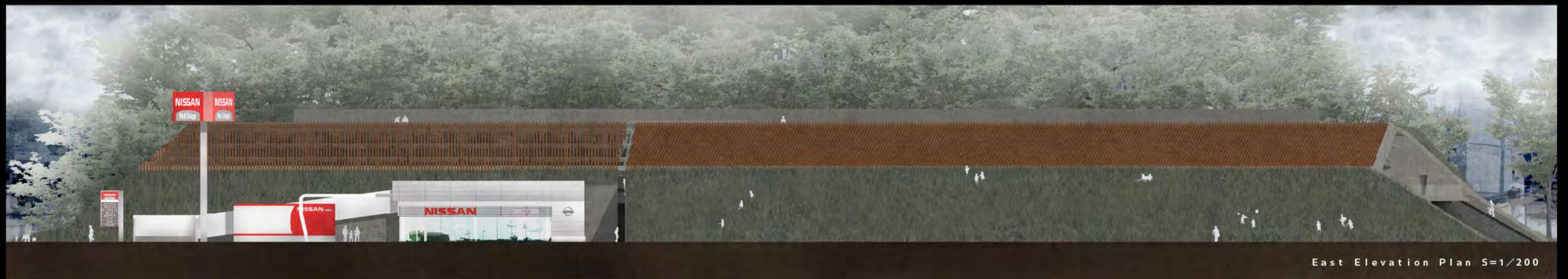
すべり台のような丘。生い茂る木々と木漏れ日。
遊園地のような、決められた遊びではなく、
どこどこで傾きのある地面を使って全身で遊ぶ。

Scenes



Site Plan S=1/200

0m 5m 10m 20m
(S=1/200)



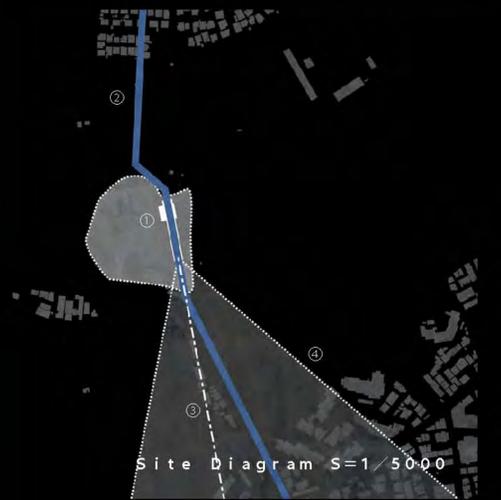
0m 2m 5m 10m 20m (S=1/100)

0m 5m 10m 20m (S=1/200)

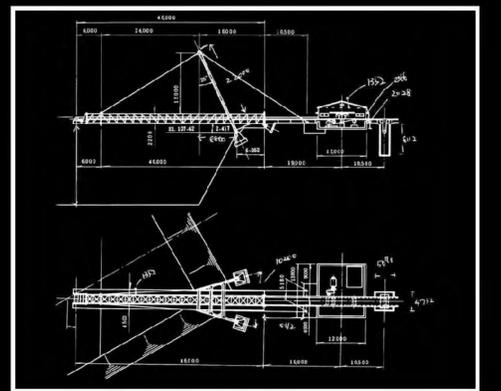


スタッカーと展望台

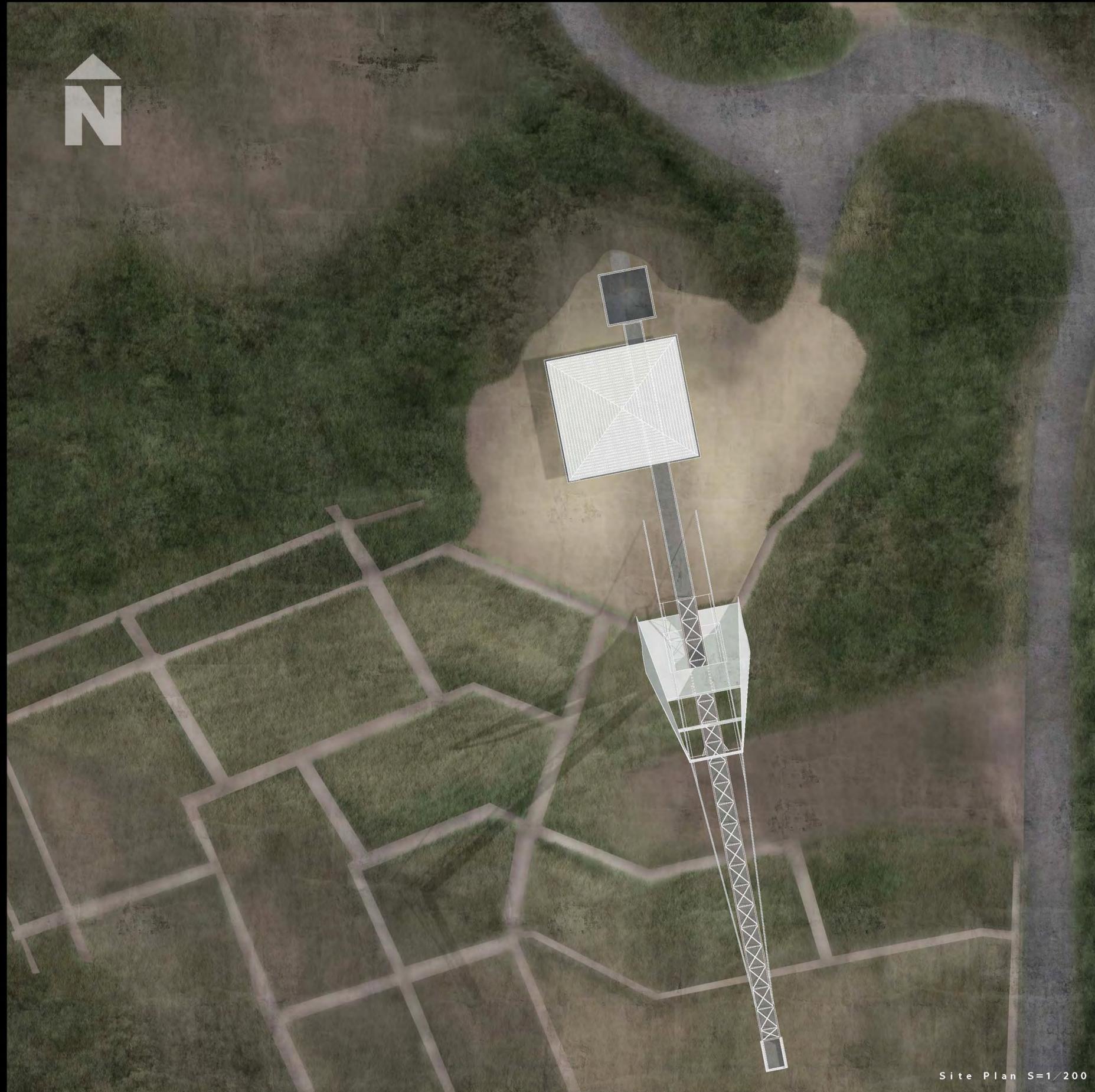
高倉ストックパイル A-1号 13. 17



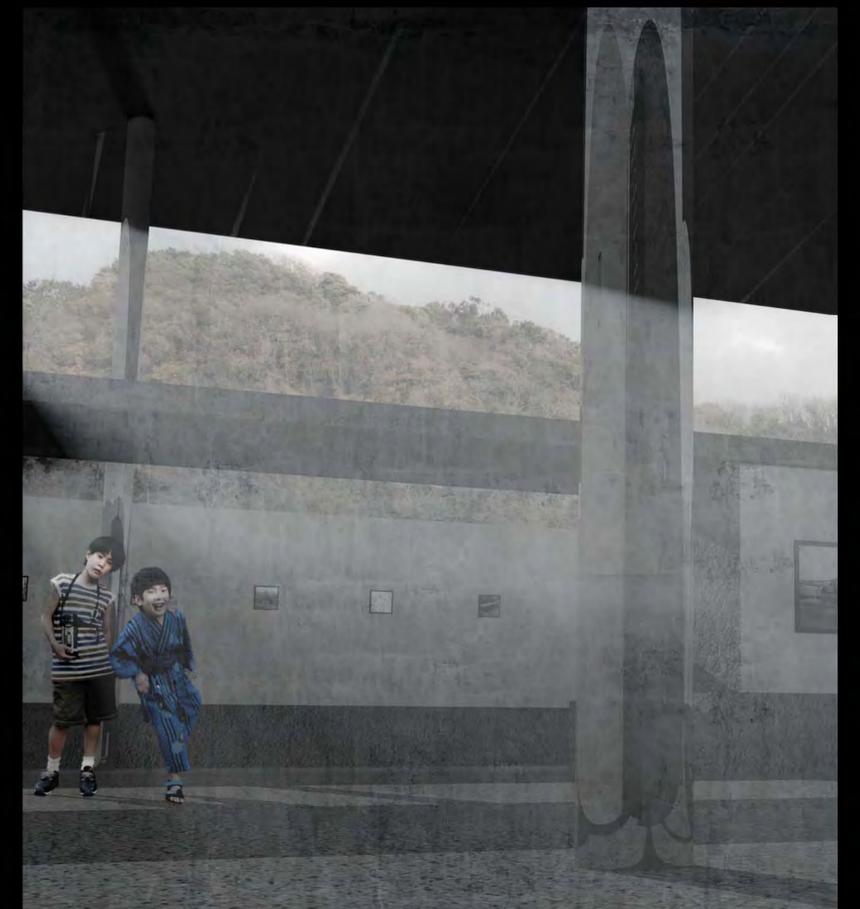
①敷地 ②コンベアの軌跡
③海へと向かう能線 ④山によって切り取られる視野



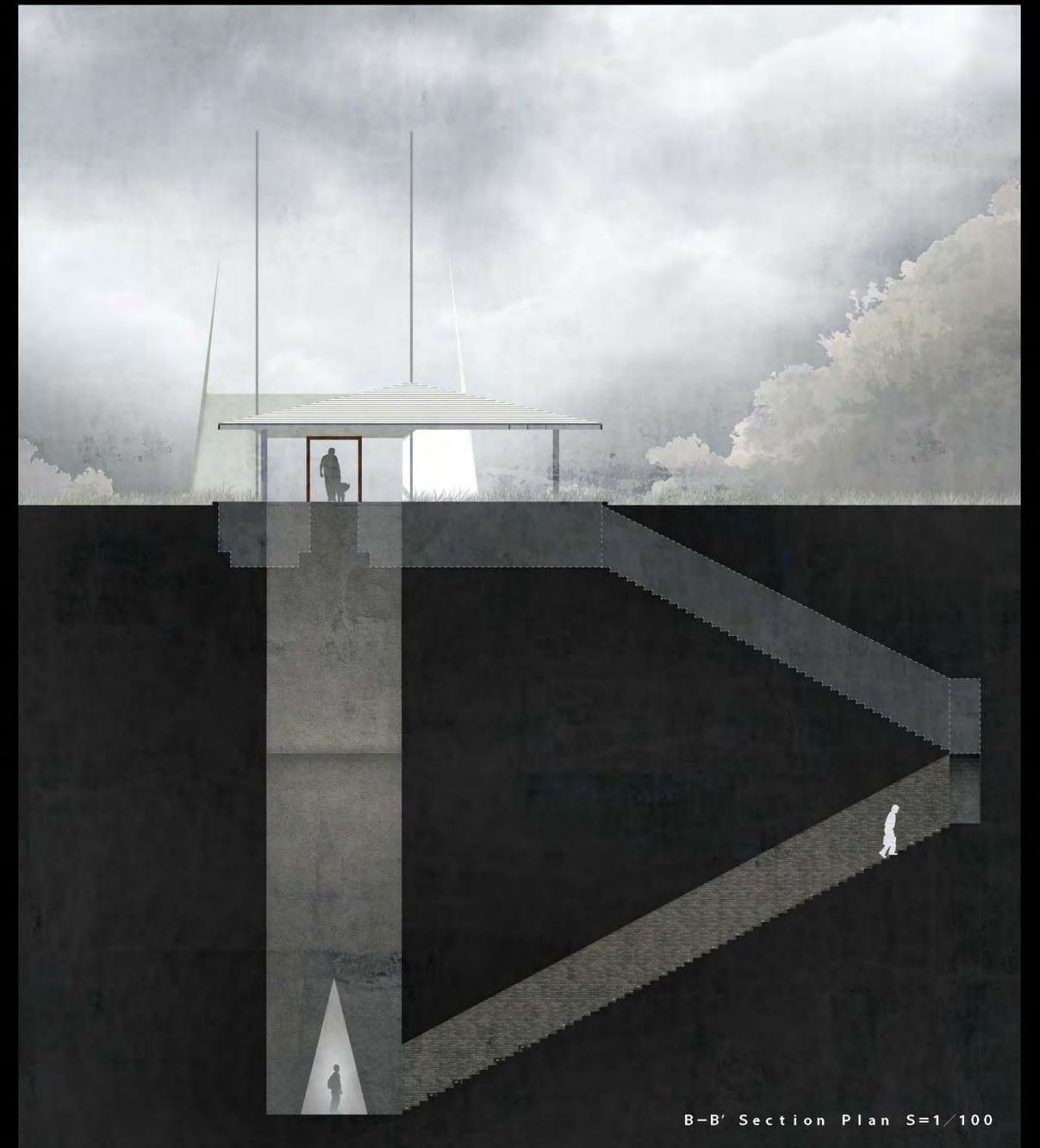
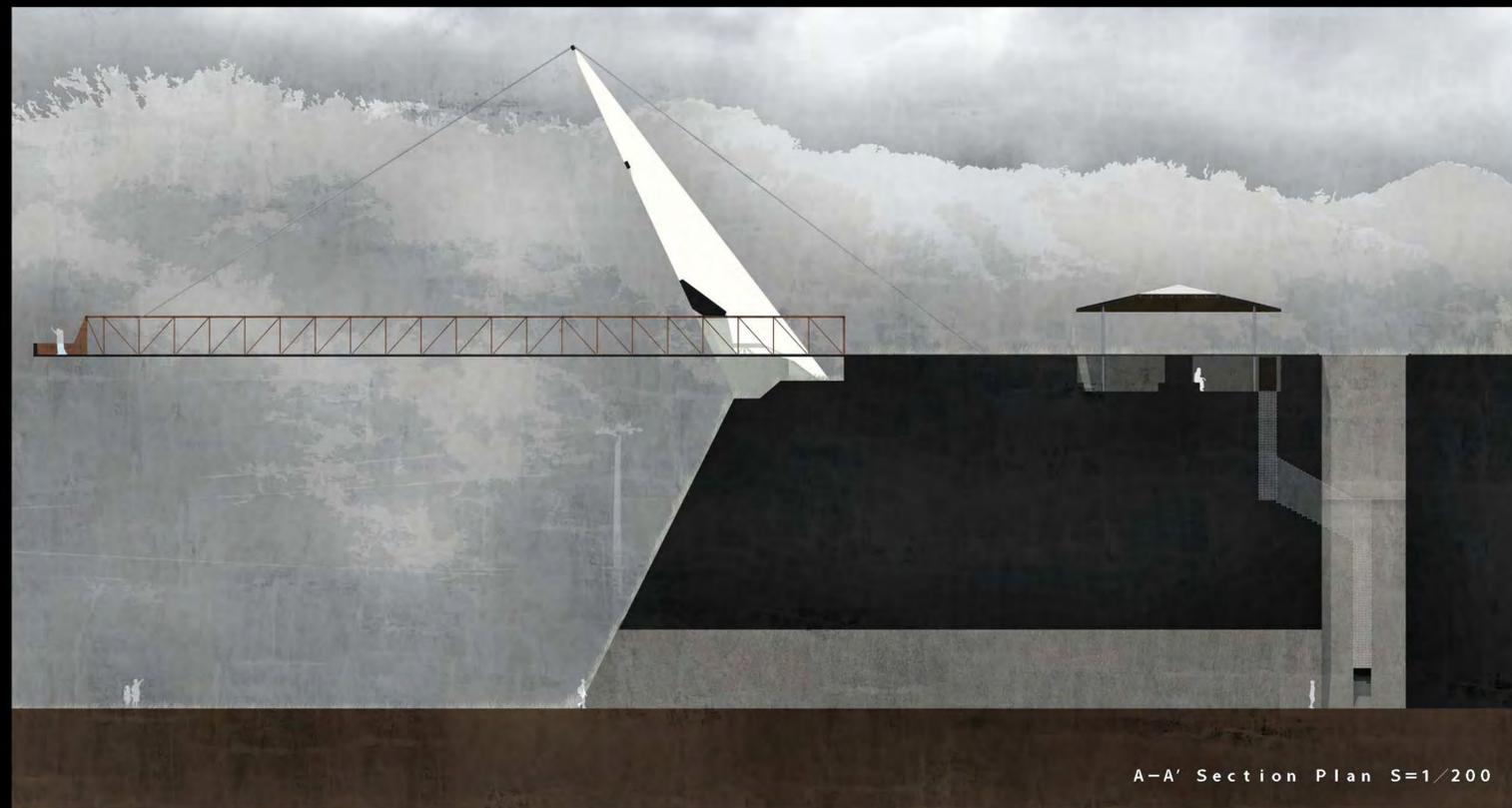
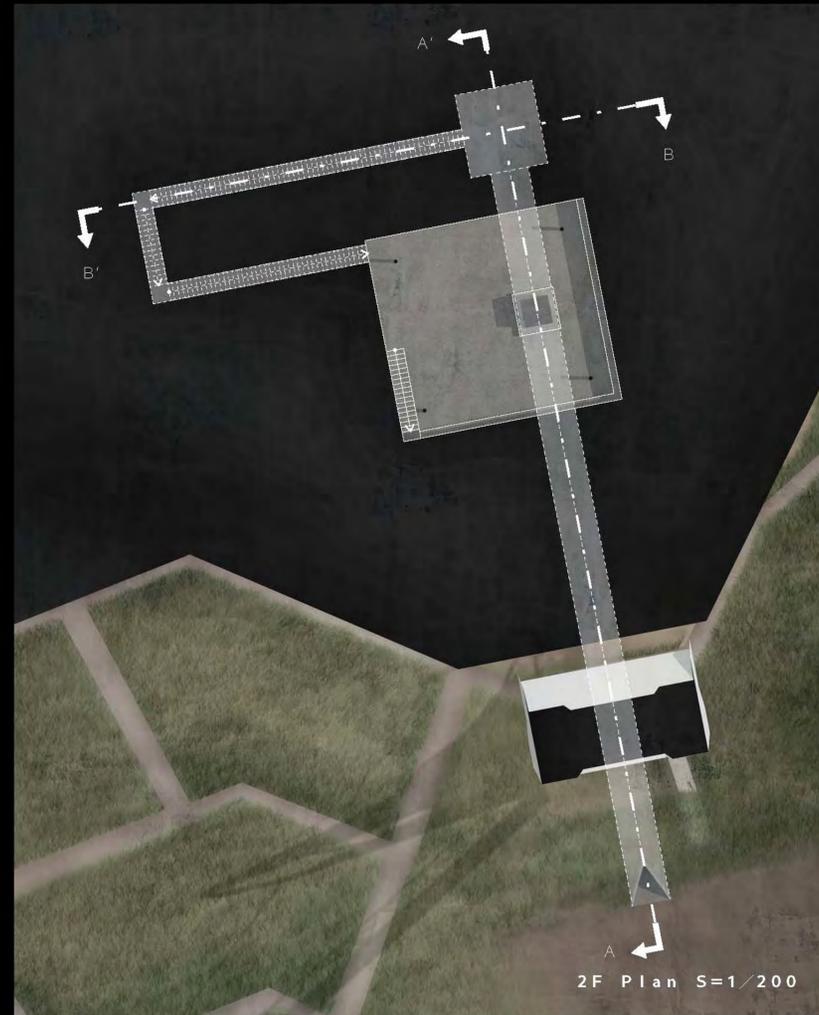
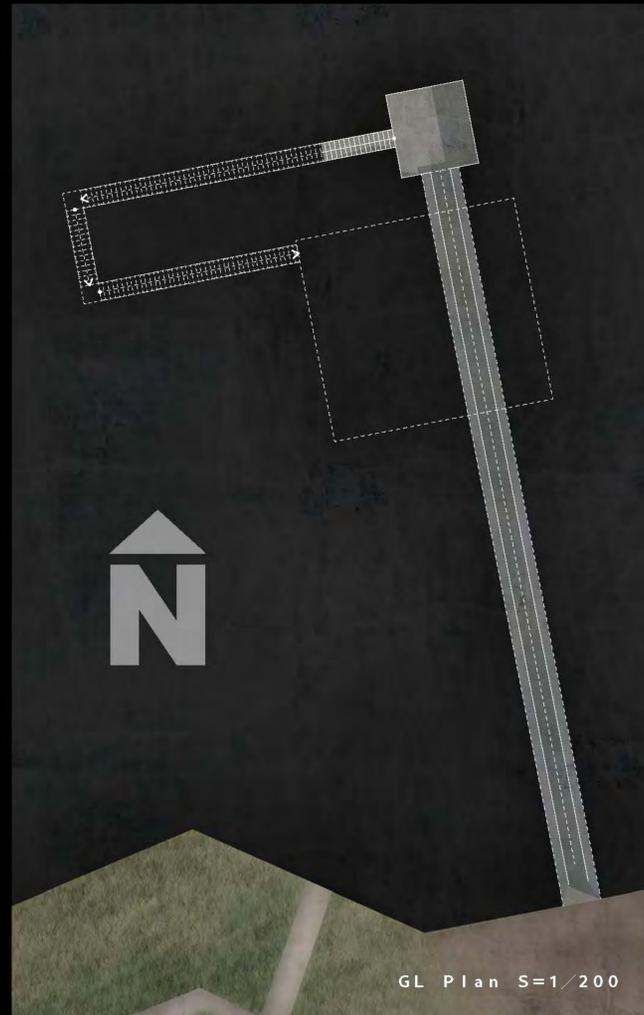
ストックパイル中央に張り出したスタッカーと、機械室の残した跡を手掛かりに、東屋と展望台、経路を設計しました。スタッカーの向かう先、コンベアの最終地点へと。



0m 5m 10m 20m
(S=1/200)

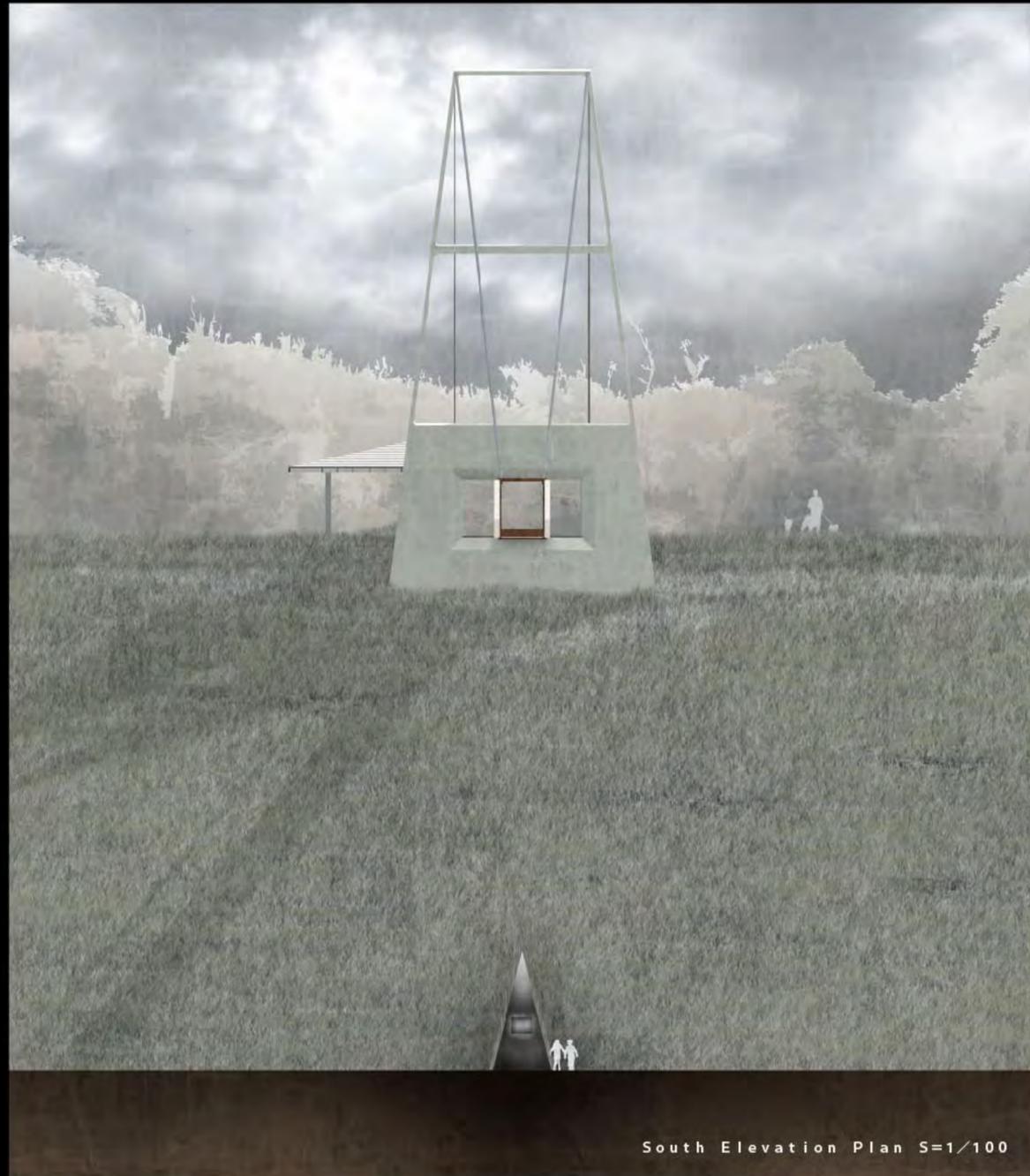


スタッカーと展望台



0m 2m 5m 10m 20m (S=1/100)

0m 5m 10m 20m (S=1/200)

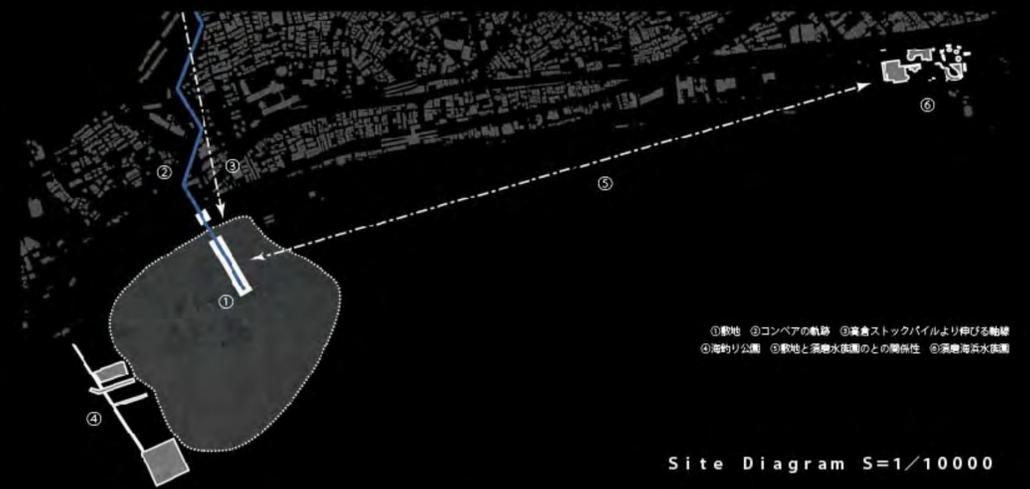


0m 2m 5m 10m 20m (S=1/100)

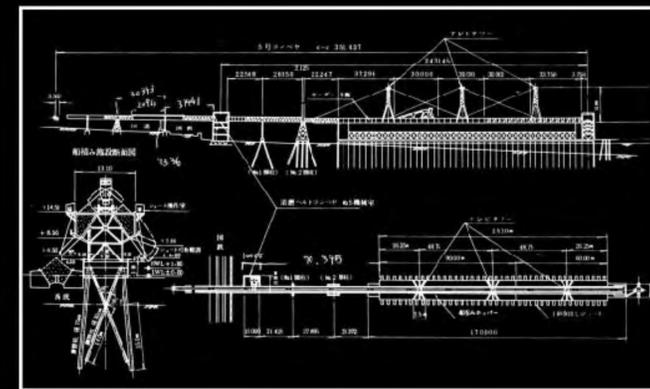
0m 5m 10m 20m (S=1/200)

始まりと、終りの場所

須磨海岸 5号 14. 53



①敷地 ②コンベアの軌跡 ③真倉ストックパイルより伸びる軸線
④海釣り公園 ⑤敷地と須磨水渠との関係性 ⑥須磨海浜水渠



かつてのベルトコンベアの終着地点



市が設計を行った、須磨海浜水渠



沖より水渠の方向を眺める



神戸海洋博物館 (設計は神戸市港湾整備)



浜の近くに設置された波の形をしたベンチ

小さな頃からよく
親に連れられて遊びに来た砂浜。

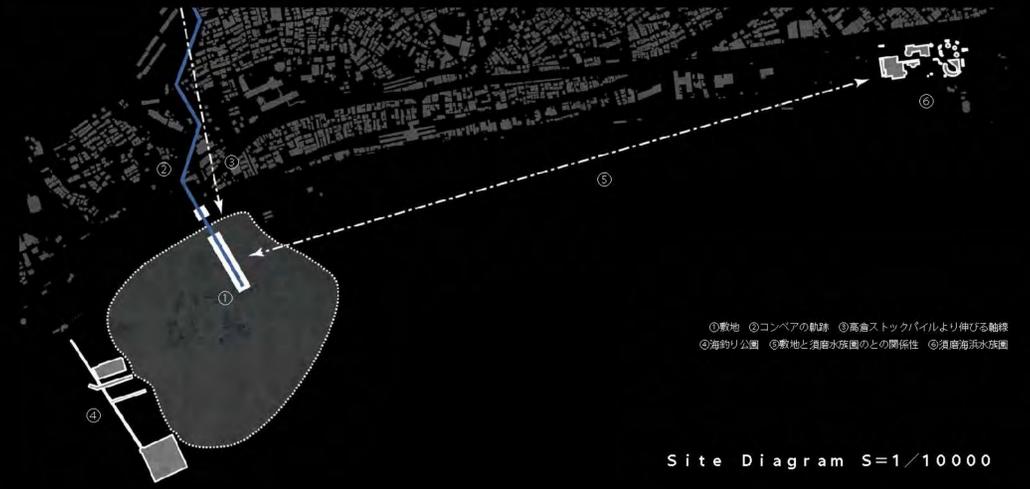
コンベアは道路を越え、線路を越え、
海へと向かいます。
桟橋の下で影、腰をかけて、
友人と話をしました。

様々な思い出のあるこの場所に、
コンベアの終着地として、
そして記憶の終着地として、
周囲の要素を取り込みながら、
水平線を保つ形として落とし込みます。

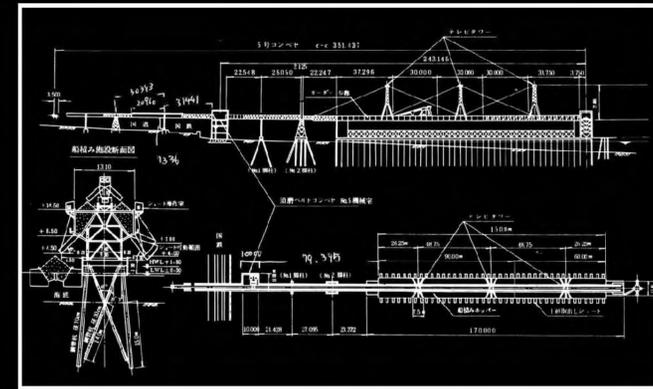
株式会社神戸市の、最初で最後の場所。

始まりと、終りの場所

須磨海岸 5号 14.53



Site Diagram S=1/10000



かつてのベルトコンベアの終着地点



市が設計を行った、須磨海水炭庫



沖より水炭庫の方角を眺める

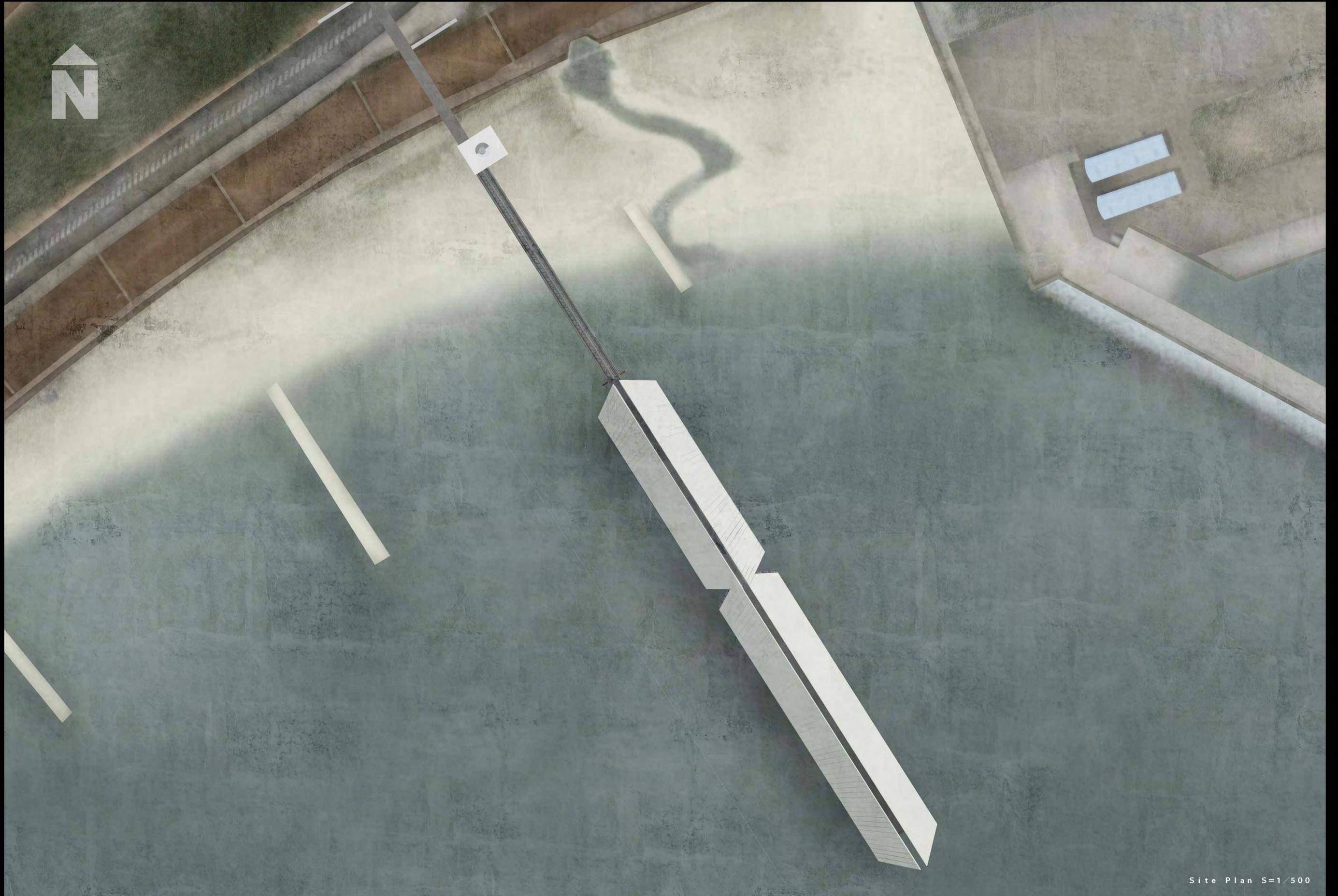


神戸海洋博物館 (設計は神戸市港湾整備局)



浜の近くに設置された波の形をしたベンチ

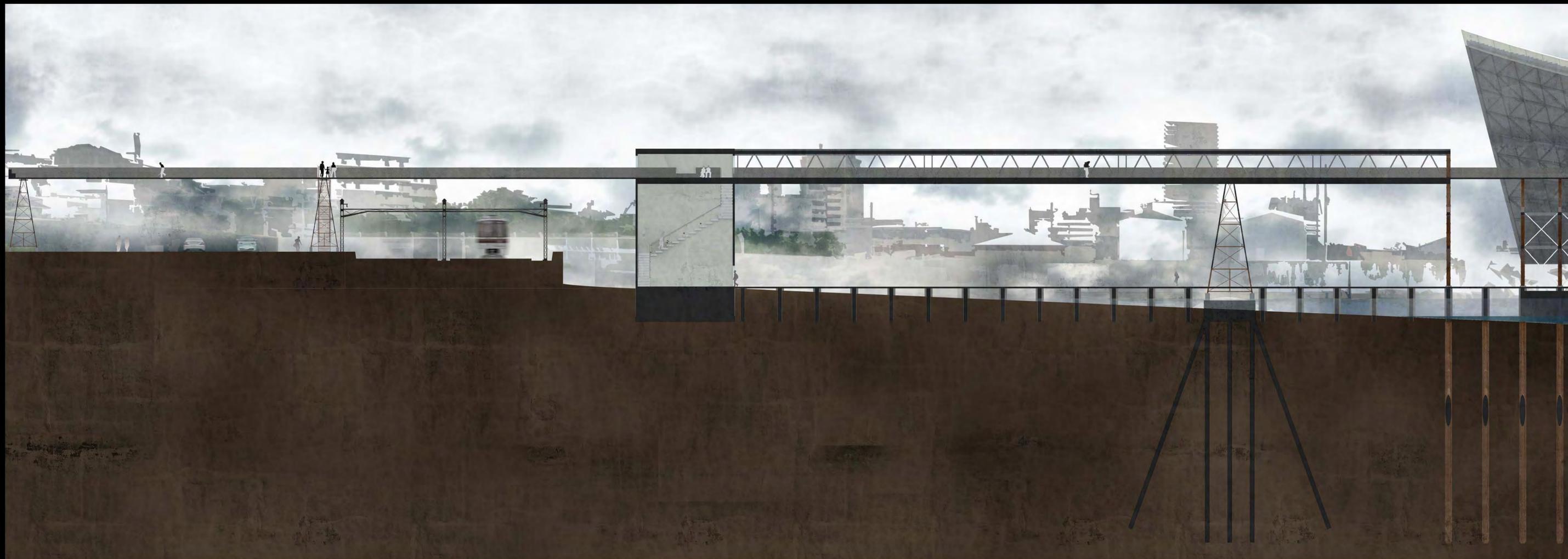
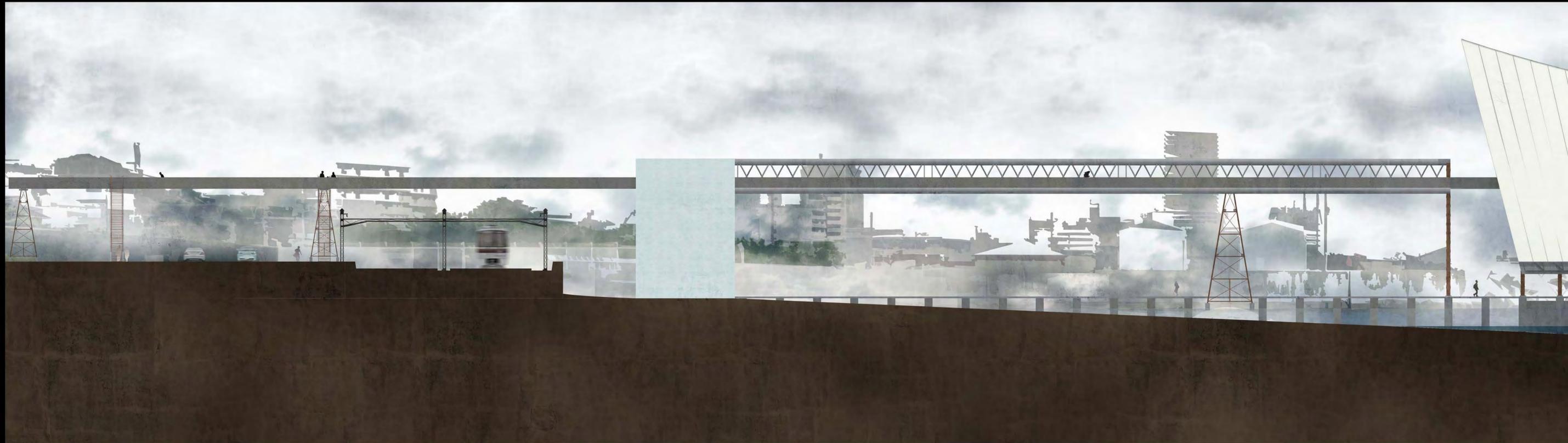
小さな頃からよく
親に連れられて遊びに来た砂浜。
コンベアは道路を越え、線路を越え、
海へと向かいます。
桟橋の下で、腰をかけて、
友人と話をしました。
様々な思い出のあるこの場所に、
コンベアの終着地として、
そして記憶の終着地として、
周囲の要素を取り込みながら、
水平線を保つ形として落とし込みます。
株式会社神戸市の、最初で最後の場所。



Site Plan S=1/500

0m 10m 50m 100m 200m

始まりと、終りの場所



0m 5m 10m 20m

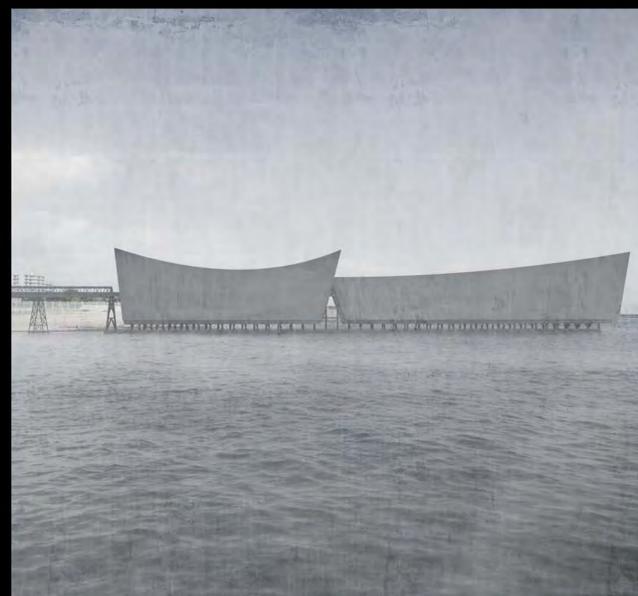
50m

100m



▼ H.W.L. +1.80m
▼ L.W.L. ±0.00m

South Elevation Plan S=1/200



0m 5m 10m 20m

50m 100m

